

編集後記

『境界を越えて——比較文明学の現在』第24号をお届けする。

実物を手に取った方にはお分かりであろうが、デザインや用紙をリニューアルした。製作体制の変更に伴うものである。従来よりもシンプルさの勝るスタイルに仕上がったことと思う。深澤晃平さんからいただいた提案をもとに一歩一歩作業を進めながら新たなかたちが生みだされたことに感慨を禁じえない。関係各位に篤く御礼申し上げます。

気分が新しくなった事象として、社会的には、ここ数年の編集後記に影を落としていたコロナ禍の影響がようやく薄らいだ。本学の授業体制は昨年5月より活動制限レベルゼロ、すなわちコロナ禍前の水準に戻っている。いっぽうで、コロナ禍の間に採られた措置で本学会の活動にプラスに作用しているものもある。研究交流会でコメンテーターの方の来校が難しいときにZoomによる登壇が可能となったこと、また、投稿の方法としてメール添付が認められたことなどが思い当たる。

メール添付が認められたためなのかは定かでないが、今回は多くの論文投稿があり、4本の掲載に至った。近年にない活況である。ほかの各区分でも掲載物が充実した結果、昨年200ページだったボリュームが240（前号の組み方で換算すると約270）ページにまで膨らんだ。経費が増大し、深澤さんの編集作業にも負担をおかけしたわけで、商業誌の編集長であれば何らかの責任を取るべきところだが、このようなときに柔軟な運用ができるのが紀要のメリットともいえよう。原稿不足に慌てて教員寄稿を執筆した経験を思い返せば、今回はまことに幸運であった。

ゲラを読みながら、巻頭のインタビューと次の講演記録との間に「ケア」という共通点があることに今さらながら気づいた。ほかにも、掲載物の本数が多ければ、それらの間に隠れた接点を読者から見出していく楽しみが生まれるだろう。こうした楽しみが次号以降にも続くことを期待したい。

なお、巻頭のインタビューは3時間30分に及ぶ録音にもとづく労作である。想田・柏木両氏のお話の興味深さと今村教授の聞き方や整理・構成の妙は言うまでもないとして、当初の7万5千字もの書き起こしを作成されたのは、従来から研究交流会等でお世話になっているメディアオーバスの小島朋美さんである。ここに記して感謝申し上げます。

2024年2月

林文孝